
have a complex-特捜戦隊デカレンジャー-

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

have a complex—特捜戦隊デカレンジャー—

【Nコード】

N9828B

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

バンがファイアースクワットから突然還ってきた！バンの異変にいち早く気付いたジャスミン。バンと詳しい話をする暇もなく、新たな敵は容赦なくジャスミンに襲い掛かった！果たして、バンの哀しみは癒えるのか？そして、デカレンジャーの行方は？更新休止中。まとめなおしてからまた載せます。

EPISODE 1 デカベース・ハプニング

「バンが帰ってくる!？」

ここは宇宙警察地球署。署長―ここではボスで通っているが―ドギー・クルーガーが発した何気ない一言が、捜査も一段落ち着いて戻ってきていた5人を驚かせていた。

「ナンセンス! エイプリルフルは過ぎましたよ、ボス」

テツの言葉に、他の4人が気が抜けたように椅子に座り込んだ。

「何だ、嘘かあ! 信じちゃったじゃんか」

残念そうに頭を振って、ポニーテールを揺らしているのは、おなじみウメコ。

「俺としたことが」

手を額に当ててため息を吐いたのが、ホージー。

「みんな、ドギーは嘘なんてつかないわ。ファイアースクワットのギョクさんから連絡があったのよ。数日前に、バンは地球署への帰還命令が下されてる。本当ならもう着いててもいいんだけど…」

ドギーの横でコーヒーを啜りながら、スワンさんこと白鳥スワンが心配そうに言う。

「ギョクさんが? じゃあ本当だ」

「センパイ、本当に帰ってくるんですね！」

「また騒がしくなるな」

一同が喜びに浸る中、つれない態度のホージーにセンが水を差す。

「ホージー、実は一番嬉しそう」

そんな和やかな雰囲気の中でジャスミンは一人、バンに心を馳せていた。

「：おかしい。何か引っ掛かる。こんな時期に、帰還命令？ なんじやそら」

ジャスミンの呟きには誰も気付かず、ウメコがジャスミンの腕を取った。

「ほらほらジャスミン！ バンが帰って来るんだよお。嬉しくないの??」

「そりゃあ、嬉しいよ。」

でも：こんな時期に帰還命令っておかしくない」

付け足したジャスミンの疑問は、みんなの笑い声にかき消された。

「時間だ。パトロール今日は：ホージーとジャスミンか。近頃侵略者^{エイリ}が悪さをしているという通報もある、頼んだぞ」

ドギーの声を合図に、皆がデカの顔つきに戻った。そう、仲間の帰還を喜んでばかりはいられない、自分達は、プロの刑事^{デカ}なのだから。

「ジャスミン、行くぞ」

「ロジャー」

心の中に何か引っ掛かるものを覚えながら、ジャスミンはデカベースを後にした。

「そうだ、新しい武器が完成したの。ウメコ、テツ、センちゃんは使い勝手がどうか、試してみて。使いにくいところがあったら直すから」

「はい、今でも十分なくらいなのに…さすがです、スワンさん」

テツが羨望の眼差しでスワンに腕を胸の前に突き出すというデカベース式の敬礼をしたあと、3人は足早に出て行く。

全員が出払ったのを見計らって、スワンが小声でドギーに囁いた。

「あの子達に言わなくて良いの？バンが帰ってくる理由…」

「…ああ。これは俺達が口を出すべきじゃない。…バンが自力で乗り越えなきゃならない問題だ」

二人は、火の玉のような熱いデカに思いを馳せた。

「…大丈夫かしら、バン…」

切に祈っていた。願わくは彼が、彼らしさを取り戻して帰ってくる事を。

バンが帰還命令を出されたと言うのは、あくまでも表向きの理由。本当は、バンが自ら降格を願い出たのだ。

それは、仲間を殺したことによる自責の念からだった。

EPISODE 2 リターン・アゲイン

「本日も快晴、異状なし!」

左右を確認し、ジャスミンは街に向かって静かに車を走らせていた。普段は世間話程度に話すのに、今日は一言も発しない。心の中ではなぜか先ほど感じた疑問が残っていていまひとつスッキリしないのだ。

ホージーは逆に、どこか浮き足立っていた。口では悪態をついていても、やはり嬉しいらしい。

「ジャスミン、今日は暗いぞ。：何かあったのか?」

少しいつもの落ち着きの戻ったホージーが、ジャスミンの曇った心を見抜いた。デカベースの古株、そして以前はよくコンビを組んでいた。だから、小さな異変でも見逃す事はほとんど無い。

「気にならなかった? 帰還命令」

ジャスミンは気になっていた疑問を軽い調子でホージーに投げかけた。

「バンはどうしてこの時期に戻ってくるんだと思う? 休み返上で頑張ってたのに、突然帰還命令なんて、おかしいと思うんだけど」

唐突な疑問に、ホージーは戸惑った。

「さあな、あいつの事だ。何かへマをやらかしたんだろ。だが、たいした事じゃないさ」

「へマ、ねえ…」

ジャスミンの集中が再びハンドルへと向かったとき、耳を劈くような悲鳴が聞こえた。

「きゃあああ——!!」

反射的にハンドルを切り、路肩に寄せて止める。

「メカ人間だ!!」

「あら、何で？」

ホージーの視線を辿ったジャスミンは思わず目を見張った。前方から、大量のメカ人間がなだれ込んで来る。

「エマージェー」

2人がチェンジしようとしたまさにその時、空から光線が降り注ぎ、メカ人間が次々と倒された。

「伏せろ！」

何処からか聞こえた声に、2人は反射的に車の陰に隠れた。その間にも、空から光線が幾重にもほとばしり、確実にメカ人間達が倒されていく。

「どこから…!?!」

2人は視線を上空に滑らせた。するとビルの屋上で、太陽と重なるようにして赤いデカスーツに身を包んだ男が、2丁の銃を巧みに操り、応戦していた。しばらく閃光と爆音が鳴り響き、全てのメカ人間を消滅させると、男はビルの屋上から颯爽と地上に降り立った。

「やっぱり地球署には俺がいないとダメじゃんか。なあ相棒、久しぶり、ジャスミン」

光の粒がデカスーツを囲み、変身が解かれる。

「バン！」

「お前…」

2人に向かって笑いかけるその笑顔は、まさしくファイアースクワットのメンバーとして、

辺境の星に派遣されているはずのバンの物だった。

「赤座伴番、ただいま帰還しましたっ。以後よろしくっ」

EPISODE 3 ハーズ・アビリティ

「今日から再び地球署に配属になった―」

「赤座伴番です！バンって呼んでください。…ってゆうかー、みんな、久しぶりッ！」

ドギーの言葉を遮って、バンはちょこまかと動き回り、一人一人に握手を求めている。

「ウメコ、みんなに迷惑かけてなかったか？」

「迷惑なんてかけないもんっ。バンこそあたしに迷惑かけないでよね！」

頭に載せられたごつい手を、ウメコは迷惑そうに払いのけた。顔には隠せない笑みを広げながら。

「セ・ン・ちゃん！ ウメコのお守り、お疲れ様ッ。大変だったでしょー」

「そうなんだよ、バン、解ってくれる？」

「もぉーセンさんまで…」

じゃれ合っているバンは、昔と全く変わっていない。ジャスミンは、自分の気にしすぎだと、自分に言い聞かせた。

「お、テツ！」

パソコンを使っているテツの方へ歩み寄り、バンはテツとハイタッチを交わした。

「元祖火の玉小僧の出戻りですねっ」

「お前きつついなあ…まあ、いいや」

そしてバンはホージーの前へ出ると、満面の笑みで固く手を握った。

「痛えよ、バン」

ホージーが大げさに顔をしかめてみせる。

「元氣してたか、相棒！」

「…相棒って言うな」

何度となく交わした言葉を発し、2人は顔を見合わせて吹き出す。

「あー、何か久々に聞いたな、バンとホージーのそのセリフ」

腕組みをして壁にもたれかかっていたジャスマンがバンの方へ歩いていくと、バンが人懐っこく笑いながら手を差し出した。

「お手柔らかに！」

「こちらこそ、ジャスマン」

2人は笑顔のまま、黒い手袋を挟んだまま握手を交わす。その手

がしっかりと触れ合ったとき、ジャスミンの脳裏にいくつかのビジョンが入ってきた。めまいがして一瞬目を瞑る。

「！」

「どうかした？ ジャスミン」

目を開けると、訝しげなバンが心配そうにジャスミンを覗き込んでいる。

「ううん、ちょっと頭痛がただけ……。風邪気味だから、さ」

大丈夫か、というバンの声に曖昧に微笑んで見せながら、ジャスミンは今自分が目にしたものを信じてくなくて俯いた。

ジャスミンの脳裏に浮かんだもの……それは、バンが銃を手に、仲間を撃っている場面だった。エスパーの自分は仲間のプライベート、触れられたくない事に触れないように常に手袋をしている。それをはさんでしまえば、相手の思念が届く事がないからだ。今までは、そうして上手く彼らの秘密を不用意に知らないようにしてきたのだ。なのに何故今、バンの思念が伝わってきたのだろうか。

強い怒りと深い悲しみ。それは、一体誰に向けられたものなのだろうか。

「じゃオレ、スワンさんにも挨拶してくるから」

バンは皆に背を向けたとき、その顔を一瞬曇らせた。しかし、誰もそれに気付かなかった。

EPISODE. 4 ボスズ・カンフィデンス（前書き）

カンフィデンスとあえて片仮名表記をしましたが、
実際英語で書くと、こうなります。

c o n f i d e n c e

信頼、という意味で広く知られていますが、
此处での意味は、

『打ち明け話』です。

EPISODE 4 ボスズ・カンフィデンス

バンが帰還してから数日、デカベースは以前より明るくなったぐらいで、街にアリエナイザーが出現することもなく平穏に過ぎていった。

エージェント・アブレラを倒してから、異星人による犯罪は数えるほど少なくデカレンジャーの出動件数は減ってきている。いずれにせよ、街の平和が保たれている。

「あれっ、今日テツとバンは？ ホージーはメカ倉庫にいたけど」

センの言葉に、ジャスミンは辺りを見回した。そう言えば、2人の姿は見えない。どうして、とたずねるかのように、4人はドギーの方を見た。

「テツは本部に呼ばれて朝早く出かけた。バンは非番だ…それより、ウメコとセンはそろそろ巡回の時間じゃないか？」

「あっ、わっすれてた…」

「じゃ、行こうか、ウメコ」

「公私混同」

ジャスミンの言葉を受け流し、2人が仲良く腕を組みながら出かけていくと、スワンがコーヒーを持ってジャスミンの隣に腰掛けた。

「コーヒーを淹れたわ」

「ありがとう、スワンさん」

「調子はどう？ ジャスミン、最近どこか上の空よ。ドギーとも話してたの。何かあったのかしらって」

チラリとドギーの方を見ると、ドギーもジャスミンの方を真つすぐに見ていた。

「心配かけてごめんなさい。少し、気になる事があって」

盗み見たバンの気持ちを伝える事は出来ない。躊躇いがちにジャスミンが目を伏せると、スワンが優しく肩に触れた。

「バンの事？ バンに触れたときに手袋の上から何かを読み取ってしまったの？」

凶星を指され、ジャスミンは大きく目を見開いた。ドギーが口を開いた。

「稀にあるケースだ。エスパーが努力しても隠せない事は。対象者の心が張り詰めていて、ほかの事を考える余裕が無い場合、その容量を大きく超えてしまった悩みが、あふれ出してしまうんだ」

張り詰めた、心…。意を決してジャスミンは話し始めた。

「バンが…バンと握手した時にーちゃんと手袋してたし、見えるはずないんだけど、一瞬、ある光景が見えて…」

解ってる、という風にゆっくり頷いて、後ろ手を組んでドギーは部屋をうろつき始めた。

「その光景は、バンが：ファイアースクワットのジャケットの人に
向かって、引鉄を引く場面で：」

脳裏に鮮明にあの時見た場面が蘇る。ジャスミンはバンの胸のう
ちを思つて目をきつく閉じた。

「でも：いくら考えても、バンが何故、あんな事をしなければな
らなかったのか：それに―あの時に、手袋を通して伝わってきたん
です。強い想いが：”悲しい””辛い”って。その後で一気に怒り
の感情が流れてきて」

ジャスミンの瞳に涙がにじんでいた。今まで読み取ったどの感情
よりもストレートで激しい思い。

「そうだったのか：。辛い思いをさせてしまったな、ジャスミン」

「いえ、ボス。でも、何故バンは―」

「ギョクさんから全て聞いた。全てはアリエナイザーが元凶だった
んだ。バンとも深く関わる、あの：」

ドギーは、ポツリポツリと話し始めた。

EPISODE. 5 イノセント・サロウ（前書き）

i n o c c e n t s o r r o w

無罪の哀しみ

EPISODE 5 イノセント・サロウ

「バンがファイアースクワットのギョクさんの下で鍛えられた後、熱意を買われて犯罪の多い辺境の星に送られた事は、以前話した事があるな」

ジャスミンは小さく肯いた。全員でその話を聴いて、喜び合ったのはほんの数ヶ月前のことだった。

「その星でバンは、其処に以前から駐留していたデカ、シヨチ星出身のフランバインとコンビを組んだ。彼は地球人と見た目が良く似ていて、バンと彼は息が合っていたそうだ。そして、いくつもの事件をコンプリートしてきた。…しかし、3ヶ月前…」

ドギーは両手を組み合わせた。

「宇宙の至る所で凶悪犯罪を犯したクラーン星人が、バン達の管轄であるリオ星に逃げ込んだ」

「クラーン星人…」

ジャスミンの表情が強張った。数ヶ月前―まだ、バンと6人で闘っていた時、まだ地球署の一員として闘っていたバンを、一度死に追いやったジェリフィスに良く似たホログラムが、中央に映し出された。あの時は、テツが電撃でバンを救った。

「これが、既にデリート許可が出ている、クラーン星人ジャイスよ」

スワンの言葉にジャスミンの頭に、再びあの映像が過る。そして、

ある事に思い当たった。

「と言う事は、バンと組んでたシヨチ星人は、ジャイスに取り憑かれて!？」

「そう、そしてその星の生物を皆殺しにしようとしたの。：バンが撃たなければ、きっとあの星はなくなっていたはずよ」

クライン星人は取り憑いた人の神経と癒着し、宿り主が死なない限り離れない習性を持つ。そうやって今まで何人にも取り憑き、多くの星を滅亡へと追い込んだのだ。

「バンはすぐさま本部に赴き、長官に解任を申し出た。あいつは：最初はデカを辞めようとしていた。だが、ギョクさんの説得で、それを思いとどまったんだ。そしてオレが再び地球署に引き取った」

ジャスミンの足元で、マーフィーが哀しそうに鳴いていた。ジャスミンはマーフィーの頭をやさしく撫でた。

「ボス、バンに触れたとき、手袋を通り抜けるくらい哀しい波動を感じたんです：。バンの心は全く癒えていないのに、どうして：」

あんな風に笑えるんだろう。ジャスミンの声は、声にならなかった。大粒の涙が、頬を伝う。

「これは、どういう風にせよ、バンが乗り越えなければいけない問題だ。：見守ってやってくれ、ジャスミン」

心配していると言う感情がにじみ出ているボスの声から、ジャスミンはしっかりと腕を前に出して言った。

「ロジャー！」

仲間なのに、何も出来ない。そんな想いが胸を刺す。マールフィーがそんな3人を気遣うように、優しく鳴いていた。

EPISODE. 6 ニュー・エネミー（前書き）

n
e
w

e
n
e
m
y

新たな敵
―

EPISODE 6 ニュー・エネミー

それから数日が過ぎ、ジャスミンはどこかバンと接する事に気が引けながらも、前の生活に戻りつつあった。バンは昔と同じような生活をすごしているようにも見えたが、確実に変わった彼の心情を、ジャスミンだけが汲み取っていた。必要以上に踏み込まれることを嫌い、休日も他のメンバーと深く接することを極力避けようとする態度に、ジャスミンは胸を痛めていた。

「もお、どうなってるの!？」

パトロールから戻ったウメコが荒々しく机を叩く。

「物に当たっちゃいけないよ」

なだめる様に諭したセンに、ウメコは食って掛かった。

「センさんは冷静すぎるんだよ! 全く、メカ人間がうじゃうじゃと…」

「メカ人間、ですか…」

丁度デカベースに帰ってきていたテツが、意味深にため息をついた。

「何だよ、テツ。何か知ってんのか？」

バンの問いかけに、テツが顔を上げた。

「そう言えば：テツ、何で本部に呼ばれたんだっけ？」

ジャスミンの言葉に答えるように、テツはポケットから手配書を取り出した。

「これですよ、皆さん」

一斉にテツの周りを囲み込み、各々が手配書を覗き込んだ。

「ブランド星人、マニア？」

「オタクみたいな名前、これって変」

ジャスミンの言葉に、ボスがモニターのボタンを押した。

「正に、地球で言うオタクだ。ブランド星人は何か1つの物に執着しすぎる習性がある。大抵なら、理性で抑えるが、稀に欲求を先走らせてしまう者が現れる。それが犯罪者だ。：このマニアは特に髪の毛の長い女性に執着していて、既に40の惑星の延べ300人を誘拐して、バラの花に変えている。被害者は未だに行方不明のままだ」

「気障な奴だな」

不愉快そうに髪を掻き上げるホージーに、バンが肘で突いた。

「相棒みたいな奴じゃん」

「相棒って言うな！ それにそんな奴と一緒にするな」

「ひとまず休戦休戦！」

軽く喧嘩になりそうなやり取りをセンがなだめた後、テツが恐ろしい仮説を立てた。

「もし、マニアがこの星に来てるとしたら：最近メカ人間が出没しているのも頷けますよ。マニラが好みの女性を探しているのかも」まさか、と言うように眉をしかめたウメコの横で、ドギーがテツの考えを支持した。

「可能性はゼロじゃないな。嚴重に警戒し、2人1組で捜査にあたってくれ。くれぐれも、個人行動は慎むように」

「ロジャー」

センはウメコと、テツはホージーと、そしてジャスミンはバンとパトカーに乗り込んだ。表向きは変わらない人懐っこい笑顔を浮かべたバンに、ジャスミンも柔らかく笑みを返した。

「よろしくな、ジャスミン！」

「バンと組むなんて珍しいこと。ま、よろしく」

EPISODE 7 イエロー・ローズ

「バン、ジャスミン！2人から西に400メートルの所にメカ人間がいるわ」

通報を受けて、スワンが無線に連絡を入れる。

「すぐ向かいます」

ジャスミンがハンドルを左に切った。

空は赤くなり始めていた。しばらく進むと、人だかりが出来て、その前には警官が人々を制止している。勤め帰りで通りがかりの人たちが興味を持って集まっているのだろう。

そして、アリエナイザー1体と、メカ人間の集団が逃げ遅れた人々を追いかけている光景に、ふたりは顔をしかめた。

「エマージェンシー」

SPライセンスの力を借りて変身した2人は、アリエナイザーに向かって走り出した。

「ジャスミン、アリエナイザーは俺に任せて、逃げ遅れた子供達とメカ人間の方を頼む！」

「OK、すぐ加勢する…スワットモード、オン！！」

ジャスミンがディー・リボルバーを抱えて翔けて行くと、バンはディーマグナムを両手に構えた。

「お前がブランド星人、マニアだな！」

「…地球署の”デカ”だなア、残念だけど、オスには興味がないんだなア♪」

全く以ってふざけている、としか言いようがないのだが、マニアは踊りながら全てバンの攻撃をかわしていった。

「畜生ッ…なんて素早い奴だ！」

頭に血が上ったバンは、一瞬隙を作った。マニアはその隙を逃さず、バンの頭上を飛び越え、雑魚達相手に闘っているジャスミンの方へ翔けて行く。

「ジャスミン！！」

「お、そのデカは女だな。綺麗な花が咲きそうだなア」

メカ人間が一斉にジャスミンに襲い掛かり、背後のマニアから注意を怠った瞬間、ジャスミンはマニラに両手で押さえつけられた。

「ちょ、ちよつと何するのよ！」

「…ジャスミン！！」

ディーマグナムを撃とうとしても、マニラとジャスミンの位置が近すぎる。このままではジャスミンに怪我を負わせかねない。

バンは、銃を持つ手の力を抜いた。

「バン！…こいつを撃って！！」

ジャスミンの叫びに、バンは困った表情を見せた。バンは、思い返していた。仲間を殺してしまった事を。そして、そのときの仲間の顔が、ジャスミンの顔になる。

バンの手からディーマグナムが滑り落ちた。

「バン！！ 立ち止まらないで」

ジャスミンの声は、マニラの術によってゆっくりと消えていった。赤い光がジャスミンを包み込み、バンが彼女の最期の言葉を考える暇も与えず、ジャスミンの姿は縮んでいき、1輪の黄色いバラと化した。

「僕の好みだなァ♪」

「…ジャスミン、ジャスミン！！」

マニラが姿を消した後、バンの叫びがビルの間で虚しくこだました。

EPISODE. 8 ファイアー・フェイリヤー（前書き）

Fear failure

―失敗を恐れる

EPISODE 8 ファイアー・フェイリヤー

メカ人間たちも撤収し、いつも通りになった街の中で、バンは変身を解いてじっとその場に立ち尽くした。両の拳は固く握られ、掌は紫色に変色している。野次馬達も沈静化した街の中で恥ずかしそうに互いを見交わし、急ぎ足で去っていく。

”バン!!”

縫^{すが}るような目で助けを求めたジャスミンの顔が脳裏に浮かぶ。また、助けられなかった。そんな敗北感のみが、バンを支配していた。

「…クソッ」

「バン、どうした、何があった!？」

「ジャスミンさんは…?」

背後から、ホージーとテツが駆けて来る。

「ブランド星人に…」

バンの様子から、たやすく想像がついた。

「馬鹿野郎! お前、デカとしての自覚あるのか!!」

厳しく詰^{なじ}るホージーの言葉にも言い返さず、バンはただ黙って俯いていた。

「ホージーさん…」

テツがバンの異変に気付き、ホージーを制止する。

一筋、そしてまた一筋、バンの瞳から雫が頬を伝った。バンが泣いている。ホージーは言葉を失い、荒々しくバイクへ戻って行く。

「センパイ、とにかく、デカベースへ戻りましょう」

テツはバンの背中を見つめながら、いつもと違うバンの様子に途方にくれていた。

デカベースに帰ってきたデカレンジャー達は各々が暗い面持ちで説明を待っていた。バンからの説明の後、

「ジャスミンがバラの花に変えられちゃったの!？」

ダン、と机を叩いてウメコが立ち上がった。バンは誰の目を見ようとしなかった。ただ、下を向いたまま小さく呟く。

「ごめん…」

「それで、ボス。バラの花に変えられた人は、どうなるんですか？」

センの言葉に、全員がボスに注目した。

「手遅れにならないうちに動かねば…長く持っても1日が限度だ。早いうちに助け出さないと、

ジャスミンは死ぬ事になる」

「そんな…っ、ボス、助け出すにはどうしたらいいんですか？」

泣きそうな顔でウメコが問いかける。

「マニアを一刻も早く倒す事だ。術士を倒せば、バラの呪いも解ける。奴のアジトを探れば、きっと見つかるだろう」

「じゃあ、マニアを探せばいいんですね」

テツが立ち上がった。

「ああ、急いで見つけて、デリートしてくれ」

ドギーの言葉に、バンを除く4人が力強く肯いた。

「バン、後で話がある。少し、残ってくれ」

ドギーが素っ気無くそう言うと、ホージーは眉をひそめ、心配そうにバンをチラリと見た。そんなホージーに、スワンが瞳をあわせ、
”大丈夫よ”というように、ホージーに微笑んで見せた。

「よし、みんな、早く行こう」

4人は急ぎ足でそれぞれの領域に散らばっていった。タイムリミットは、24時間。

外はもう、太陽が傾き始めていた。

EPISODE. 9 テイク・ヒズ・シリアスリー（前書き）

Take his seriously
— 思いつめる

EPISODE. 9 テイク・ヒズ・シリアスリー

「バン、大丈夫か」

ドギーは小さくなっているバンに、温かいコーヒーを渡した。スワンも席を外しているため、今、ここにはドギーとバンしかない。

バンは徐^{おもむろ}に壁を拳で殴りつけた。

「お願いです、ボス！俺をクビにしてください！！ もう、無理なんです」

思いつめた表情で、バンはドギーの顔を見た。今までのバンなら絶対に言わなかった台詞に、ドギーはバンの心の傷を垣間見た気がした。

「俺はデカ失格です。地球のみんなどころか、仲間ひとり守れない。武器を誰かに向けると、

…あのときのこと鮮明に蘇るんです！……また誰かを殺しちゃうんじゃないかって、ジャスミンを傷つけるんじゃないかって、だから俺は引鉄を引けなかった。そうしたらジャスミンは…ジャスミンは……！！どうすれば、助けられるのか、俺にはもう…」

次第に感情を昂らせるバンを座らせながら、落ち着いた口調でドギーが尋ねる。

「バン。一つだけお前に聞いておきたい。ジャスミンがブランド星人に捕まった時、ジャスミンはどんな顔をしていた」

バンはジャスミンの態度を思い返していた。

”バン！！こいつを撃って”

「ジャスミンは…必死な顔でこいつを撃てって…あと、立ち止まらないでって」

バンの言葉に、ドギーは大きく息を吐いた。

「ジャスミンはな、今のバンの悩みも全て知っていた。そして、戦いに関する恐怖心も…。それでも、お前に自分の命を託した。いや、完全に信用していたんだ」

「え…」

バンは唇を噛んだ。ドギーの少し怒りを含んだ声が、バンの心を突き刺した。自分の愚かさ加減を呪った。臆病風に吹かれた自分を、どうしようもなく嫌いになった。

「ボス…でも、今の俺にはデカとして、任務を遂行できません…」

心では分かっているけど、今はどうしようもないのだ。バンがドギーに背を向け、大股でドアから出て行く。その顔は、情けないとか言えない位歪んでいたが、ドギーは見て見ぬ振りをする。ドギーはイスに掛け直し、腕を組んだ。

出るのは、ため息ばかり。今のドギーは、何がバンにとって最善の選択なのか、図りかねていた。

スワンが用意しておいてくれた、冷めたコーヒーを啜る。その時、

外に気配を感じた。

「誰だ！ 誰かいるのか」

「…ボス」

姿を見せたのは、厳しい顔つきをしたホージーだった。

「今の話を」

「聞きました。…聞かせてください、あいつに何が遭ったのかを」

しっかりとした口調で、ホージーは頭を下げた。

「…うむ」

ドギーはホージーを招きいれ、ジャスミンに話した事と同じ事、そしてその後の事を話し始めた。ホージーは時折顔を歪めながら、椅子に深く腰をかけながらじつと話に聞き入った。

EPISODE. 10 セカンド・ヴィクティム（前書き）

s
e
c
o
n
d

v
i
c
t
i
m
s

二番目の犠牲者

EPISODE. 10 セカンド・ヴィクティム

「センさん、見つかった！？手がかり」

ウメコが息を弾ませてセンの元に駆けて来る。

「いや、まだだよ」

センが肩をすくめて見せると、ウメコが落胆した。

「あーもう！八方塞がりだよ。テツやホージーはどうだろう」

「連絡ないってことは、僕らと一緒に感じじゃない？」

「時間が無いっていうのにいい」

ウメコが頭を抱える。

空はすっかり暗くなってしまうていた。探し始めてから、どれくらいの時間が経ったのだろうか。こうしている合間にも、ジャスミンに残された時間はどんどん消費されていくのだ。焦りが心を騒がせ、集中力を欠けさせる。

「落ち着いてウメコ。とにかく、探すしかないよ。ブランド星人マニアは、髪の長い女の子が好き。そういう子が集まりそうなところを当たるといいよ」

センは冷静に言う。ウメコはその場にしゃがみこんで、黙りこくってしまった。

「…センさんは、何でそんなに落ち着いていられるの？ジャスミンが死んじゃうかもしれないんだよ。それに、何だかバンも様子がおかしいよ。いつもなら真っ先にジャスミンを助けにデカベースを飛び出していくのに。」

あたしは、嫌。いつもと違うデカベースなんて、嫌！！」

そのまま、頭を埋めて啜り泣きを始めたウメコの頭を、センが優しく撫でた。

「…センさん？」

「落ち着いてなんかないよ、ウメコ。でも、僕らは捜査するしかないんだ。ここで泣いていても、時間は一刻一刻と過ぎていく。あと24時間―いや、20時間ちよつと、全力でマニアの居場所を突き止めて、ジャスミンを助け出すんだ。それに、バンの事も、きつとバンは話してくれるよ。僕らはずっと仲間なんだからね」

「……仲間？…そうだよね」

ウメコが立ち上がった。

「よしっ、リーダーウメコ、復活！」

につこりと笑って、ブイサインを掲げるウメコに、センは力強く肯いた。

「女の子が集まりそうなところを虱潰ししらみつぶしに調べよう」

同じ頃、テツはメカ人間達に囲まれていた。

「まったく、ナンセンス！これは変身するのかなさそうですね。…エマージェンシー！」

白く眩い光がテツを包み込み、チェンジする。白いデカスーツの胸には、金色のバッジ。特キョウの証だ。

テツは手に装着しているブレスロトルのハンドルを起こし、スロトルを回転させた。腕に稲妻が絡みつく。

「ライトニングフィスト！！」

メカ人間達が奇声を上げて消滅していく。それでもその数はどんどんと増え、テツ1人では対応しきれないほどになっていた。

「伏せろ、テツ！」

鋭い声に身体が反応し、テツは慌ててかがみ込んだ。その瞬間、背後から銃撃の音がした。

「キィー！！」

攻撃はメカ人間に確実に当たり、奇妙な声を上げていたメカ人間が全て消滅した。

「ホージーさん、遅いですよ」

テツは人懐っこい笑みでホージーを見た。

「…ちよつとな」

メカ人間を倒しきった事で、2人は油断していたのかもしれない。次の瞬間、黒い影がテツを捕まえた。

「ホージーさん!!」

「テツ!」

ホージーが構えたとき、時既に遅し。テツの身体は見る見るうちに縮み、白いバラへと変わってしまった。

「綺麗な色だなア。強い奴は好きだなア。このバッジ、偉い人がつけるんだろう?」

「お前!!」

ホージーが飛び掛った瞬間、白い閃光が走り、マニアの姿は忽然と消え失せていた。

「き、消えた!? 畜生…」

EPISODE. 11 スティング・オペレーション (前書き)

S t i n g o p e r a t i o n

―おとり捜査―

EPISODE. 11 スティング・オペレーション

―ジャスミンはな、今のバンの悩みも全て知っていた。そして、戦いに関する恐怖心さえも……。それでも、自分の命を託した。いや、完全に信用していたんだ―

バンはドギーのその言葉と、自分を真っ直ぐに見たジャスミンの瞳を、繰り返して反芻^{はんすう}していた。あの辺境の星で、フランバインが見せた真剣な瞳と重なる。

当てもなく歩き続け、海の方まで出てしまっていた。空は暗い。街灯もなく、ただあるのは灯台の明りのみ。だがその光は遠くを照らし出し、今のバンを照らし出してはくれない。

その明りをめがけて、バンは進んでいた。そこに辿り着いたからと言って、特にする事も何もないのだが……ただ海が広がっているだけ。

やがてバンは、砂浜の上に腰を下ろした。

バンは考えていた。一体自分はどうしたいのか。そもそも何が怖いのか。複雑に絡み合った事情と自分の気持ちを整理する。

一番怖いのは、また誰かを殺してしまわないかと言う事。あの時の事は不可抗力と言えども、事実は消えない。自嘲気味に笑う。今までの自分を考えると、此処まで後ろ向きになる事はなかった気がする。

”バン！ あたしを撃って”

ジャスミンは確かにそう言った。

バンは頭を垂れ、地面に拳を叩き付けた。

「チクシヨ…」

小さな呟きとなって、声が漏れる。

”バン”

その時、頭の中でジャスミンの声が聞こえた気がした。

”バン、助けて。バンに出来る事をして”

「ジャスミン!？」

バンは立ち上がった。マイナスな感情は、取り払われてしまっていた。

「俺に…できる事!! ジャスミン…助けるからな」

ジャスミンを探す事。バンは専用パト、ドーベルマンに乗り込むと、エンジンを掛けた。

「出発!」

その瞳には、かつての、火の玉小僧と呼ばれたバンの面影が蘇りつつあった。

車を発進させたと同時に、無線が働き、ドギーの声が響いた。

『バン、セン、ウメコ、
至急デカベースに戻ってくれ』

バンが急いでデカベースに戻ると、既にホージー、ウメコ、センの3人がドギーの周りを囲んでいた。

「バン、遅いぞ」

「ごめん！」

潔くバンが頭を下げ、顔を上げた。

「…あれ、テツは？」

そこにいた全員の暗い面持ちで、バンは眉をひそめた。

「テツが、ブランド星人に連れ去られた」

ドギーの言葉に、バンの動きが止まった。

「俺のせいだ」

ホージーがうなだれる。

「俺とテツが、メカ人間を倒して、油断した。その隙に、テツがバラに変えられて…」

「バラの花に？え、どうして?! 男なのに！」

ウメコが素っ頓狂に言う、ホージーをサポートするように、ドギーが説明を始めた。

「どうやら、被害にあうのは女性だけじゃないらしい。もしかしたら、強い人間が狙われるのかもしれない。テツは、白い花に変えられたそう。タイムリミットまで、あと15時間。早くジャスミンとテツを助け出すんだ。但し、お前達も狙われかねん。くれぐれも油断はするな」

途方に暮れた面々が顔を見合わせる。その時、センが壁の方へ歩いて行って逆立ちをした。

「どっこいしょ」

：別に、遊んでいるわけではない。センはこれをするとういうわけか、いいアイデアが浮かぶのである。

ドギー、スワン、バン、ホージー、ウメコの視線を一身に集めながら、センは元の体勢に戻った。

「わかった」

果たしてセンの作戦とは――

EPISODE. 12 タフ・ポリスマン（前書き）

tough policeman

強情な警察官

さあ、一体誰の事でしょう。

まあ、お分かりだと思いますが。

EPISODE 12

タフ・ポリスマン

「わかった。誰かが囹になって、マニアをおびき出せばいいんだ」

「おとり…思いつかなかった」

腕組みしながらウメコは呟いた。

ドギーは深く考え込んだ。

「確かに、手っ取り早いが、その分囹にリスクが増える事になるぞ」

「うーん…」

各々がいい作戦は無いかを考える中、バンが声を上げた。

「ボスッ、俺がやります」

すっかりいつも通りの調子に戻ったバンに、デカベース内は一瞬和やかな空気が戻った。だがただひとり、ホージーは厳しい顔をしていた。

「バン…」

「じゃあ、あたしたちは隠れてマニアを待てばいいんだね！」

確認するようにハキハキとウメコが言うと、バンはそれを頑なに否定した。

「俺1人で十分だって」

「バン、お前何言ってるんだ。無理に決まってるだろ!!」

ホージーがバンの肩を掴む。

バンの顔から笑顔が消える。そしてホージーと目も合わさずに言
った。

「はつきりいって足手まといなんだよ」

デカベース内の空気が凍りついた。スワンは心配そうにバンを見
ていた。ドギーは、何も言わずに見守っている。

「何…っ」

「ちょっと、バン! 酷いよ」

「そういう言い方はないだろ、バン」

3人がいきり立って、バンに詰め寄る。バンはパツと視線を外し
てなおも続けた。

「ファイアースクワットに引き抜かれたぐらい、俺は宇宙で認めら
れてるんだぜ。センちゃんも、ウメコも、相棒も、今の俺には足手
まといでしかない。ジャスミンも、テツも俺が助ける。だから、み
んなは来なくていい」

最後の一言に、ホージーはハツとした。バンの思惑が見て取れる。
ドギーも、スワンもホージーを見てゆっくり頷いてみせた。

「バン! 俺は今のお前に相棒なんて呼ばれるのはごめんだ」

突如激しい口調でまくし立てたホージーに、バンは少し傷付いたように見えた。

「何だと!!」

ホージーに掴みかかっていくかと思ったが、バンは思いとどまったらしく、弱々しく言った。

「…何でもいいけどさ、……絶対来んなよ」

バンがスタスタと出て行くと、ホージーは扉を睨みつけた。

「あいつ…1人で抱え込みやがって…ボス、俺が行きます」

ホージーが上着を掴んで駆け出す。

「ちょっと、ホージー!？」

センとウメコが首を傾げながらも付いていく。

「ドギー…大丈夫かしら、あの子達」

「ああ…スワン。あいつらの繋がりはそんなに脆いものじゃない。俺が引き抜いた奴らだ。骨があるさ」

ドギーは満足げに頷き、自分のSPライセンスを引き出しの奥に仕舞い込んだ。

「何よ、偉そうな事言って…貴方も不安だったんじゃない」

2人は顔を見合わせて微笑んだ。

EPISODE. 13 スペシャル・パートナー（前書き）

special partner

特別な『相棒』

EPISODE. 13 スペシャル・パートナー

「待てよ、バン！」

大股で歩み去っていくバンにホージーが駆け寄っていく。

「来るなよ」

気色ばむバンを無視し、ホージーはバンの横を歩き出した。

「お前、何故地球署に戻ってきたんだ」

唐突に話を切り出したホージーを怪訝に思いながら、バンはチラリと隣を見た。

「…なんてな」

「へ？」

豆鉄砲を食らったような顔のバンに、ホージーは少しだけ表情を和らげた。

「ボスに聞いたぞ」

全て分かっている、と言いたげに頷いて見せたホージーの態度は、バンの表情に暗い影を落とした。

「お前のせいじゃないさ。誰にだって殉職の危険性はあるんだ。俺にだって、…もちろんお前にだって」

バンは観念したように歩調を緩めて、手近なベンチに腰を掛けた。それに従うように、ホージーも横に座る。

「お前が組んでたフランバインって奴も、きっと覚悟の上だ」

ベンチの前には、小さな広場があり、子供達が声を上げて走り回っている。バンはそれをじっと見つめていた。

「…本当は、俺が死ねばよかったんだ」

消えそうな声で、バンは呟いた。

「あの時、俺達はジャイスの目撃情報を追って、廃工場に駆け込んだ。何人も、取り付かれて、殺されて… もう、見てられなかった。それで俺達2人は他の仲間に黙ってジャイスを追った。俺が突っ走って報告を遅らせたんだ… 踏んだとおりに、そこにジャイスがいて、マグナムを構えた瞬間、外で子供達が遊ぶ声がしたんだ。そっちに気を取られた瞬間、ジャイスが真っすぐに俺に向かってきた」

じっと耳を傾けていたホージーの表情が固まる。バンは目を閉じて、あのときの事を思い返した。

あの時―ああする以外にどんな最善策があったのだろうか―

EPISODE. 14 イエスタデイ・トゥモロー（前書き）

直訳すると

y e s t e r d a y t o m o r r o w

昨日・今日となってしまうが、

ここではあえて

『過去・未来』としてみたいです。

EPISODE 14 イエスタデイ・トゥモロー

「危ない！！ バンバン！ ううっ」

バンは我に返った。自分の前に仁王立ちしている、フランバインの顔が歪んでいた。

「フランバイン！！俺を庇って…」

「ヒヒヒヒ…こいつの身体は憑き心地がいいぜ」

背中にびったりと癒着したジャイスの言葉に、バンは背筋が寒くなる思いだった。かつて、自分に取り憑いたジェリフィスも、バンの心臓が止まるまで決して離れなかった。

フランバインの手が、腰の銃に伸びる。

「バンバン、僕を撃て！」

一生懸命フランバインが手に力を入れても、制御できない。

「嫌だ！」

「この星が減ぼされてもいいのか、バンバン！！ 僕達は何の為にこの星を守ってるんだ！ この星の人が安全に暮らせるようにだろ！」

「嫌だああ！！」

声を振り絞って全身で拒絶するバンの目には、涙がにじんでいた。

自分が、誰よりもわかっている。もし、自分がフランバインの立場になったとしても、彼と同じ事を言っただろう。そう、地球で、仲間に頼んだように。

「頼む、僕は…今まで骨身を削って守ってきたこの星を、自分の手で壊したくは無い。大好きなこの星を、誰にも奪われたくは無い。まして…自分で壊したくは無い」

涙混じりの激しい言葉に、バンの顔がゆがんだ。

「フランバイン…」

「なーに痴話げんかしてるんだよ、ここでデカを1人処分だ」

銃口がバンの心臓を狙っていた。

「バン！ 僕は抑えられない。早くやってくれ。お前がこの星を救ってくれ！！」

バンの右手で震えていた銃が、静止した。星を救うという彼の言葉がスイッチだった。フランバインの絶叫がこだまし、次の瞬間、乾いた銃声と共にフランバインは仰向けに吹っ飛んだ。

「フランバイン！！！」

バンが駆け寄ると、フランバインは残りの力を振り絞ってバンに囁いた。

「守るために死ぬってのも、悪くない…」

血を流し、息絶えたフランバインを見下ろしながら、復讐に全身を奮い立たせた。許せなかった。怒りに燃えたバンにとって、ジャイスを始末することは難しくなかった。

「ジャイスを倒した足で、本部に行った。辞表を提出するために。でも、受け取ってはもらえなかった。俺は、子供と一緒になんだ。騒ぐだけ騒いで、何度同じ事があっても、後に活かせない。相棒やジャスミンとは違って冷静沈着じゃないし…何が火の玉小僧だ!!俺は…」

バンは頭を抱えた。よみがえってくるあの瞬間の映像が、全てを狂わせる。信念に燃えた自分さえも、悪だったかのような錯覚。

「お前、ファイアースクワットに行って成長してきたかと思ったが、正反対だったな…見損なったぞ、バン」

浴びせられた冷たい言葉に、バンはその場に凍りついた。

「昔のお前なら、自分の事どうの言う前に誰よりも早くデカベース飛び出して、無断でも何でもジャスミンやテツを助けに行くだろ!」

「相棒…」

「俺は、昔の突っ走るバンの方が好きだ。今のお前は、俺達が本当に自分の命を託してきた仲間じゃない。ただのウジウジした情け無い男だ」

「…ごめん」

しおらしいバンの態度に、ホージーはため息を吐いた。

「失敗を取り返すためにはどうしたらいいか考えろ。お前がそんな事を言ってるってフランバインが知ったら、失望するぞ。火の玉みたいに真っ直ぐに走っていく奴についていくってことは、相手を信頼してないと出来ない。殉職した刑事^{デカ}も、地球署の俺たちも、お前のことを信じてるから仲間なんだ」

力強く語ったホージーは我に返って口を噤んだ。そして、照れくささを隠すようにチラリと腕時計をチェックした。

「あと…12時間。行くぞ、バン」

バンの背中を叩いて喝を入れると、バンはしっかりした顔つきで立ち上がった。

「…行くぜっ、相棒ッ!」

「相棒って言うな」

2人は目を見交わし、一瞬のうちに真剣な表情で駆け出した。

EPISODE. 15 キック・オーバー（前書き）

k i c k o v e r

『始動』

元祖火の玉が始動しました。

EPISODE 15 キック・オーバー

「ボス、囃作戦はやめます。俺とバンで、今奴を探している最中です。見つけ次第突入します。センちゃんやウメコにも伝えて下さい」

「よし、わかった」

無線でそう連絡した後、ホージーは運転席でアクセルを思いっきり踏み込んでいるバンを見た。

その横顔は、自分が昔見ていたバンの顔だ。ホージーは安心して微笑んだ。…もちろん、知られないようにだが。

「クソッ、何処に行きや見つかるんだよ」

ぼやくバンに、ホージーが相槌を打とうとした時、無線からセンの声が響いた。

「こちらセン。ポイント297でメカ人間が大量に出現。まるで何かを守ろうとしてるみたいだから、アジトかも。応援頼みます」

「よし、わかった：バン、P297だ」

バンはアクセルを思いっきり踏み込んだ。此処からそう遠くない。直ぐに行けるだろう。

「センちゃん、ウメコ」

デカレンジャーに変身したバンとホージーが駆けつけると、ふたりは30体はいると思われるメカ人間相手に苦戦していた。

「バン！…大丈夫なの？」

ウメコが1匹をデイスティックで倒しながら叫んだ。事情は何も聞かされていないが、バンの異変にもちろん気付き、二人も心配していたのだった。

「何の事だよ、早くジャスミンとテツを助けないと！」

バンは肩を回すと、叫び声を上げながら群れの中に飛び込んでいった。

「あと3時間！ 時間が無いぞ、ブランド星人は何処だ！」

ホージーの言葉に、センがメカ人間に押されながらも、応える。

「み、南の…洞窟の…中！」

「つたく、キリがないぜ！…スワットモード、オン！！いくぞ、相棒！」

「だから相棒って言うな」

バンは真っ先にスワットモードを装着し、デューリボルバーを手に、手当たり次第に攻撃を始めた。連続音に、味方が怯む。ホージーは反射的に屈んだ。

「伏せろ、みんな!!」

ホージーの声を合図に、3人が伏せる。爆音が響き渡り、長いと思われた一瞬の内にメカ人間は次々と爆発して消滅した。

「まったく：お前ってやつは―」

「さっすが、バンだねえ」

「もう、死ぬかと思ったんだから!」

3人にギロリと睨まれても気にする風もなく、バンは満面の笑みで満足げに頷く。

「ファイアースクワットの腕前を見せてやったんだよ! さ、早く突入するぞ!!」

「ロジャー!!…あたしについてきて!」

「お前が言うな」

ツッコまれながらもウメコが持ち前の元気のよさを発揮し、センとホージーも強く肯いた。

「気をつけろよ。まずは、ジャスミンとテツの居場所を探すのが先決だ」

「よし、みんな。気合入れていけよな!」

4人はディールリボルバーを片手に、洞窟に乗り込んでいった。

EPISODE 16 リバイバル・ハリケーン

一方攫われた二人は、薔薇にされたまま精神の世界にいた。

灰色にぼやけた狭い場所で、限界が近づいたジャスミンの体力は
かなり減っていた。脂汗を浮かべ、じっと蹲うずくまっているジャスミンに、
テツはなす術も無く、ただうろうろと歩き回っている。

「やっぱり変身できませんね」

腕のSPDライセンスが何の効果もなさ無い事は立証済みだ。

「先輩たちは、間に合うでしょうか」

「…大丈夫、バンなら…きっと来てくれる」

ジャスミンの声はかすれ、既に足の方から硬直が進んでいた。意識も、少しずつバラの花と化してしまった本体に近付いているのだろうか。

「先輩、なーんか様子がおかしかったような…」

首を傾げるテツにジャスミンの顔にも一瞬影が落ちる。

「信じるべし!…きつと、来る」

握った拳が、グググ…と掌に食い込む。せめて、自分が意識を保っているうちに…切にそう願っていた。

「ククク…やっぱりデカレンジャーは違う。上質な花卉だなア。これはやっぱり、強い奴ばかりを集めた方が楽しそうだなア」

黄色と白のバラを、じっくりと愛でている。

「あと1時間もすれば、意識も取り込んで、花はもっと輝きを増す…」

勝ち誇ったようにマニアが笑ったとき、洞窟の入り口を塞いでいたドアが、凄まじい音を立てて崩れ落ちた。

「そうはさせるか!!」

足音が何重にも響き4人が突入すると、マニアは薔薇を取り落とし、立ち上がった。

「なアんだ!? デカレンジャーめが! ボクのコレクションルームに立ち入るな!!」

ウメコが奇声を上げる。一面に薔薇の花が咲き誇り、とても洞窟の中とは思えない佇まいだったのだ。バンは素早くマニアに飛び掛ると、羽交い絞めにした。

「この変態が!! さっさとジャスミンとテツを返せ!」

「は、離せ！ お前も薔薇にしてやる！ さぞかし紅い花を咲かせるだろう」

「逃げて、バン！！」

センの叫びと、走り始めたホージーの渾身をこめたパンチが重なった。バンは瞬間的に屈むと、マニアの攻撃を間一髪でかわした。

「軽率な行動は慎め、バン！ お前まで薔薇になってどうするんだ」

「助けてくれると思ってたよ、な、相棒！」

「相棒って言うな」

すっかりいつもの調子になった二人に、センとウメコが水を差した。

「まあ、漫才は後にしてよ。早くしないとジャスミンが」

立ち上がったマニラを四人が睨み付けた。

「行くよッ」

ウメコがSPライセンスを掴む。

「お前が仕切るな！」

うんざりしたようにホージーがため息をつく。だが、その右手にはしっかりとライセンスが握られていた。

「エマージェンシー！！ スワットモード、オン！」

4人の声が力強く重なると、まばゆい光が包み込んだ。4人の怒りと正義が刃となってマニアを圧倒した。

「スワンさんにもらった新しい武器で、サクッと倒しますか」

ウメコが指先でいじくったのは、”改良版”デューリボルバー。スワンが出掛けに渡してくれたときの言葉が蘇る。

「命中率の上昇、素早さ、そして何よりもグレードアップしたのは威力よ。命中させた相手の細胞にまで浸透し、内部破壊を起こせるの。ある研究機関に協力してもらって開発に成功したのよ」

「ジャスミン、テツ、今助けるからな」

「待て！」

いきり立つ2人を、ホージーが制止した。

「何でだよ、相棒！」

「周りを見ろ！ 下手したら薔薇に当たって一般人を殺してしまうぞ。何とか奴を外におびき出すんだ」

ホージーの鋭い指摘に、ウメコが不敵な笑みを浮かべた。

「へっへっへっへ…ウメコさんに任せてみない？」

EPISODE. 16 リバイバル・ハリケーン（後書き）

大変遅れました。

文法等の修正は、投稿分まで終了しました。
以前よりは読みやすくなったかと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9828b/>

have a complex-特捜戦隊デカレンジャー-

2010年10月10日07時02分発行